

鈴木文則、『ハイチ、目覚めたカリブの黒人共和国』、凱風社、1999。

「カリブの真珠」と呼ばれた国がある。小さいながらも、きらりと光り輝き、豊かな富をもたらした国、世界で最初の黒人による独立共和国。このような愛称で呼ばれたハイチという国をどこかで耳にしたことがあるだろうか。

19世紀初頭の世界を見ると、ヨーロッパ以外の多くの地域で独立国家はごくまれであった。そのひとつはアメリカであり、またひとつがハイチであった。ハイチはコロンブスの「発見」の後、17世紀からフランスの植民地となり、プランテーション農園のためにアフリカより多くの黒人が強制移住させられてきた。その奴隷たちが、フランス革命の精神を承けて1804年にフランスより独立したのがハイチである。民主主義の達成度から見ると、当時の最先端にあった国だといえよう。ところが、現在は相次ぐ軍政の果てに、失業率は推定60%にのぼり、年間所得一人400ドル（5万円弱）と最貧国の一つに転落し、国民の多くが将来に対する経済不安に暮らしている。

フランスがプランテーションにより莫大な利益をあげ、「カリブの真珠」と讃えられた国が現在ではなぜ最貧国となり、政情不安や貧困に苦しむのだろうか。すべてはその歴史にある。

ハイチの歴史を繙くと、現代世界の矛盾を一心に引き受けた国を見る思いがする。ハイチはナポレオンを相手とした独立戦争の「ツケ」を100年にわたり払い続け、その間にも植民地経済の歪みから国土の荒廃を招いた。山々は土地を求める人々の収奪により伐採され、緑を失い、暴力の論理を振りかざす軍人の支配する国へと変容し、アメリカの隣国という地政学的に有利な土地にあっても、グローバリゼーションの恩恵にあずかることなく、むしろマイナス面のみを引き受けてきたのである。

本書は、ハイチに魅了された写真家がその歴史をふまえつつ、1988年から1996年までのハイチ社会の動きをドキュメント風に、また旅行記としてつづったものである。独裁者の横暴や米軍の侵攻する悲惨の中で、庶民がどのような暮らしを送っていたのかを記していることから、厳しい現実ばかり浮かび上がり、「カリブ海の真珠」は光り輝いているとは言い難いかもしれない。それでも、楽園であったハイチがなぜ「大海を漂流する舵のない小舟」となってしまったのか、私たちに国際政治の現実を突きつけている。

ちなみに、在日ハイチ人は10名を数えないそうだが、幸いなことに、新潟大学はハイチからの留学生を1名迎えている。Mさんは都市計画と環境問題を研究しているが、本書を一読すれば、なぜ彼女がそのような研究テーマを採り上げたのかよくわかるだろう。新潟での研究が故国の再建に役立つよう祈るばかりである。

A. レノレ、『出る杭は打たれる：フランス人労働司祭の日本人論』、岩波書店、岩波現代文庫社会55。

私たちはだれなのか、私たちの暮らす社会はどのようなものか、この問いに答えるため、自分たちを注意深く見つめて分析するという方法がある。これとは反対に、他者が私たちをどのように見つめているのか、他者のまなざしに私たち自身の姿を読みとる方法もある。本書は、フランス人カトリック司祭が20年間に及ぶ滞在中に日本の下請け零細企業で働き、そこで

の見聞を書きとめた日記をもとに書かれたドキュメンタリー風の日本人論である。原書はフランス人の読者を念頭にしてフランス語で書かれ、「日本を下から見て」という副題が付いている。取りあげられている話題はすでに20年ほど前の日本社会のもので、いわゆる「3K」（危険、きつい、汚い）の現場から日本社会のひずみや矛盾を見つめたものとなっているが、現在も状況がとりわけ好転しているわけではないだろう。本書で紹介されているような事例は極端でないかといぶかしく思う方がいるだろう。しかし、著者の関心は、労働条件に恵まれているとは言い難い日本社会を断罪し、非難することではない。むしろ慈愛をこめた眼差しと祈りのうちに、現実の厳しさを共に生きようとするところにある。そもそも、フランス人司祭として、知的労働に携わりながら宣教活動を行うのではなく、労働者とともに働くことこそアンドレ神父の祈りであり、宣教そのものなのだ。本書を手にして、私たちが考えさせられるのは、日本社会の厳しい現実に関する情報だけではない。むしろ、他者の眼差しに映る私たちの姿を感じ取ることにある。他者は私たちをどのように見ているのか、他者の目に映る私たちはいったいだれなのかを考えることにつきる。これは一種の鏡像効果であり、他者による異文化の表象理解を起点とする、自文化の表象理解だということもできよう。と同時に、アンドレ神父のやさしい眼差しに触れ、そこから私たちの姿を見つめ直すこと、このような内省にしばしの時間を捧げることができるよう。